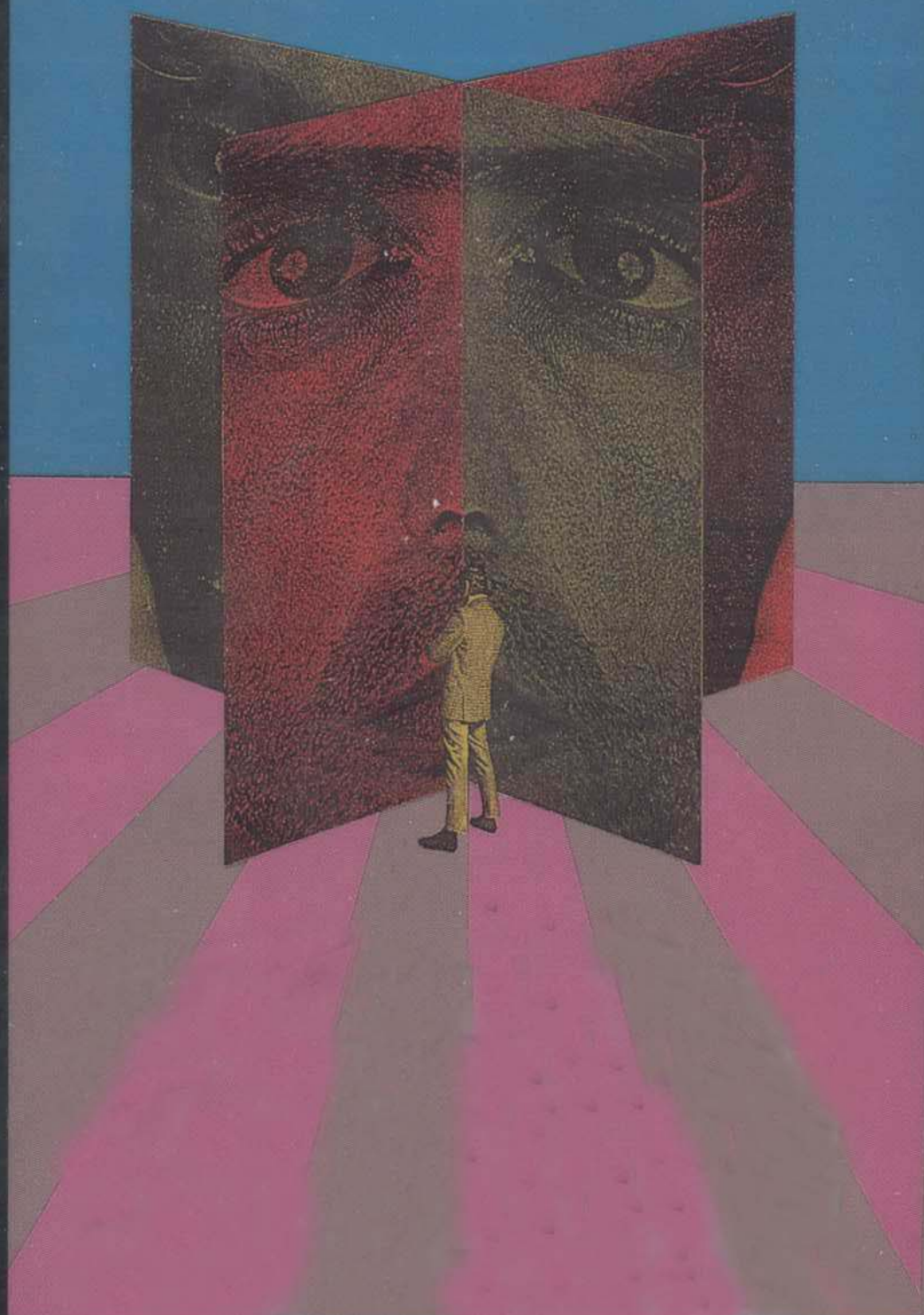


マジックミラー

Magic Mirror

by Arisu Arisugawa

有栖川有栖



マジックミラー

一九九〇年四月五日第一刷発行

KODANSHA NOVELS

定価はカバーに
表示してあります

著者―有栖川有栖 © 1990 ARISU ARISUGAWA Printed in Japan



発行者―野間佐和子

発行所―株式会社講談社

東京都文京区音羽二二二 郵便番号 一一二 電話東京(〇三)―九四五―一一一(大代表)

印刷所―株式会社廣済堂 製本所―株式会社堅省堂

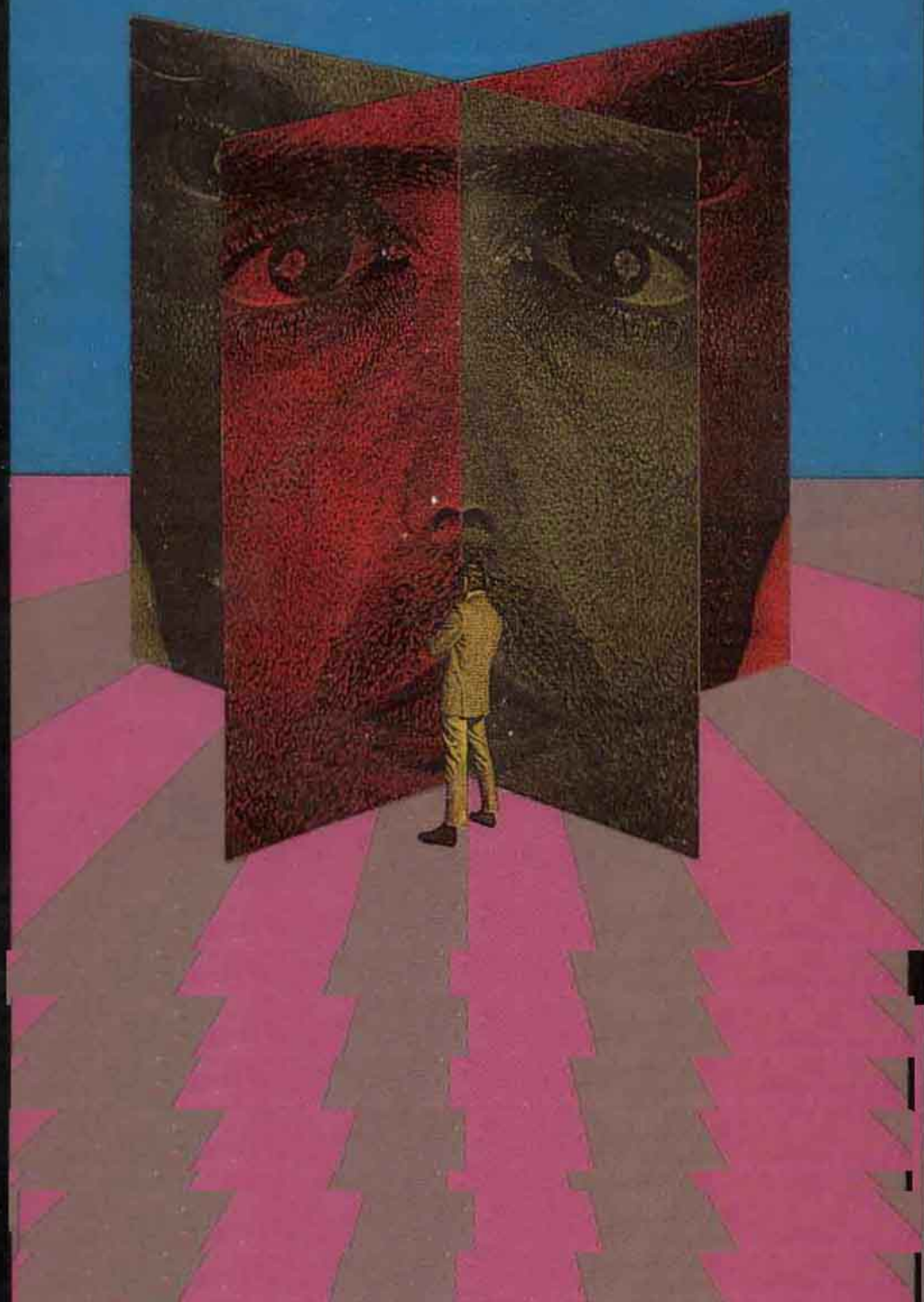
落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にてお取替え致します。
なお、この本についてのお問い合わせは文芸局文芸図書第三出版部あてにお願いいたします。

マジックミラー

Magic Mirror

by Arisu Arisugawa

有栖川有栖



定価700円(本体680円)

有栖川有栖

(ありすがわ・ありす)

昭和34年4月26日大阪市生まれ。同志社大学法学部卒。在学中は「同志社大学推理小説研究会」に所属。仲間に、サントリーミステリー大賞読者賞を受賞した黒崎緑、現在とんでもない本格推理でデビューを果さんと鋭意執筆中の白峰良介氏がいる。処女作「月光ゲーム」第二作「孤島パズル」(東京創元社刊)は本格ミステリマニアの絶大な支持を得ている。講談社ノベルス初登場、新本格推理にたのもし仲間が加わりました。

犯人は双子の兄弟に違いない！ しかし滋賀県の余呉湖畔で女が殺された時、夫である兄は博多に、弟は酒田にいたという鉄壁のアリバイ。そして第二の殺人。被害者は兄弟のどちらかだが、死体には頭と手首がない！ 犯人が創造した空前の大トリック。縦横無尽に張り巡らされた伏線がラストで一つになるこの快感！

ミュージックミニシアター

栖川有栖

ODANSHA 講談社
ノベルス NOVELS

ブックデザイン 熊谷博人
カバーデザイン 辰巳四郎

目次

ダイアログ 11

第一章 湖畔の死 13

第二章 悲しむ者 49

第三章 彼らのいわゆるアリバイ

第四章 私立探偵 112

第五章 首のない死体 146

第六章 迷路の街 177

第七章 アリバイ講義 213

第八章 夜の虚像 234

モノログ 273

あとがき 276

——十月二十八日、地獄荘で語り明かした人たちへ

登場人物

空知雅也……………推理作家

柚木新一……………古美術商

柚木恵……………その妻

柚木健一……………新一の双子の弟

高井美保……………その内縁の妻

高井秀司……………美保の前夫

三沢ユカリ……………恵の妹

片桐光雄……………編集者

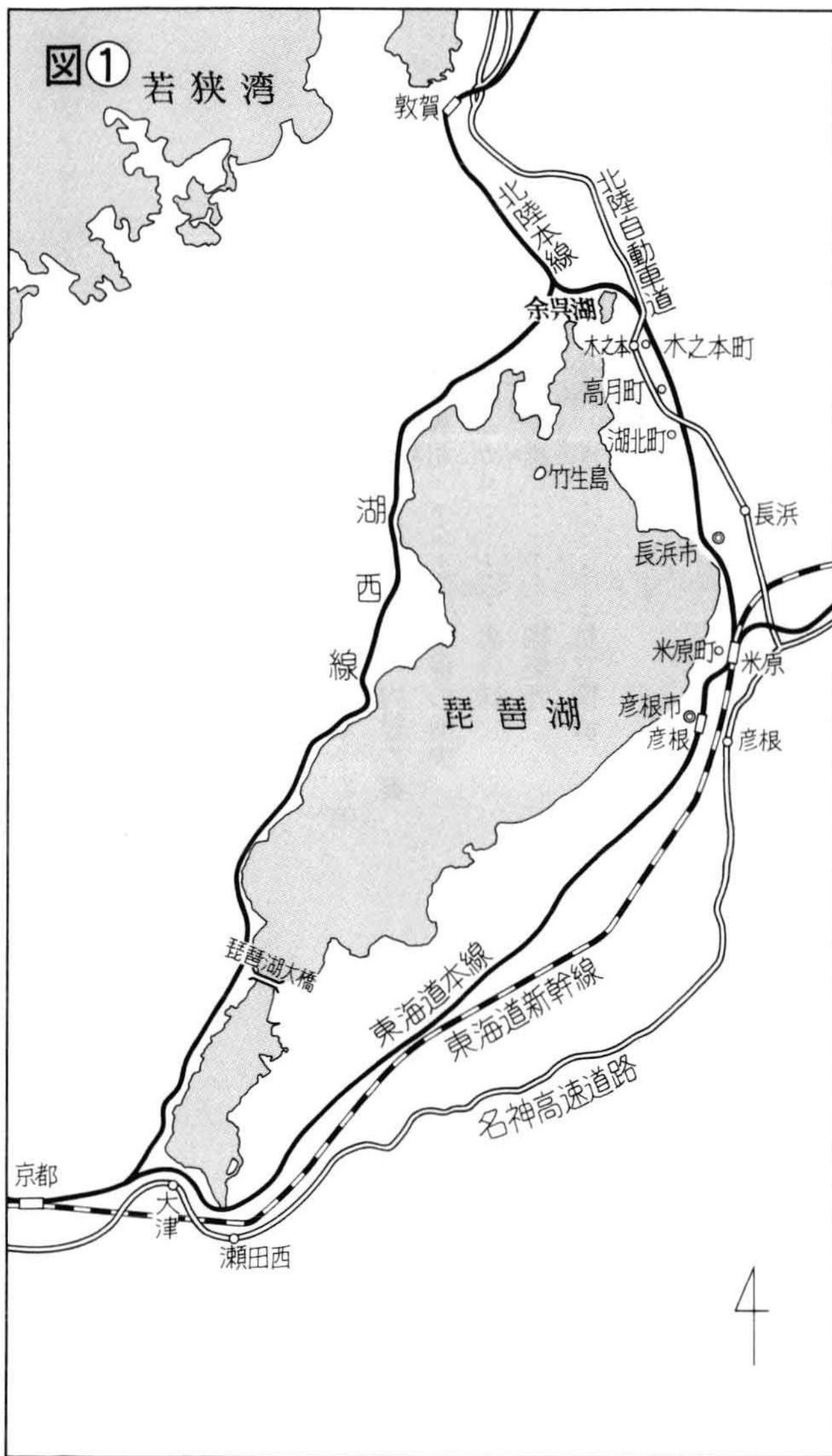
小桑龍……………私立探偵

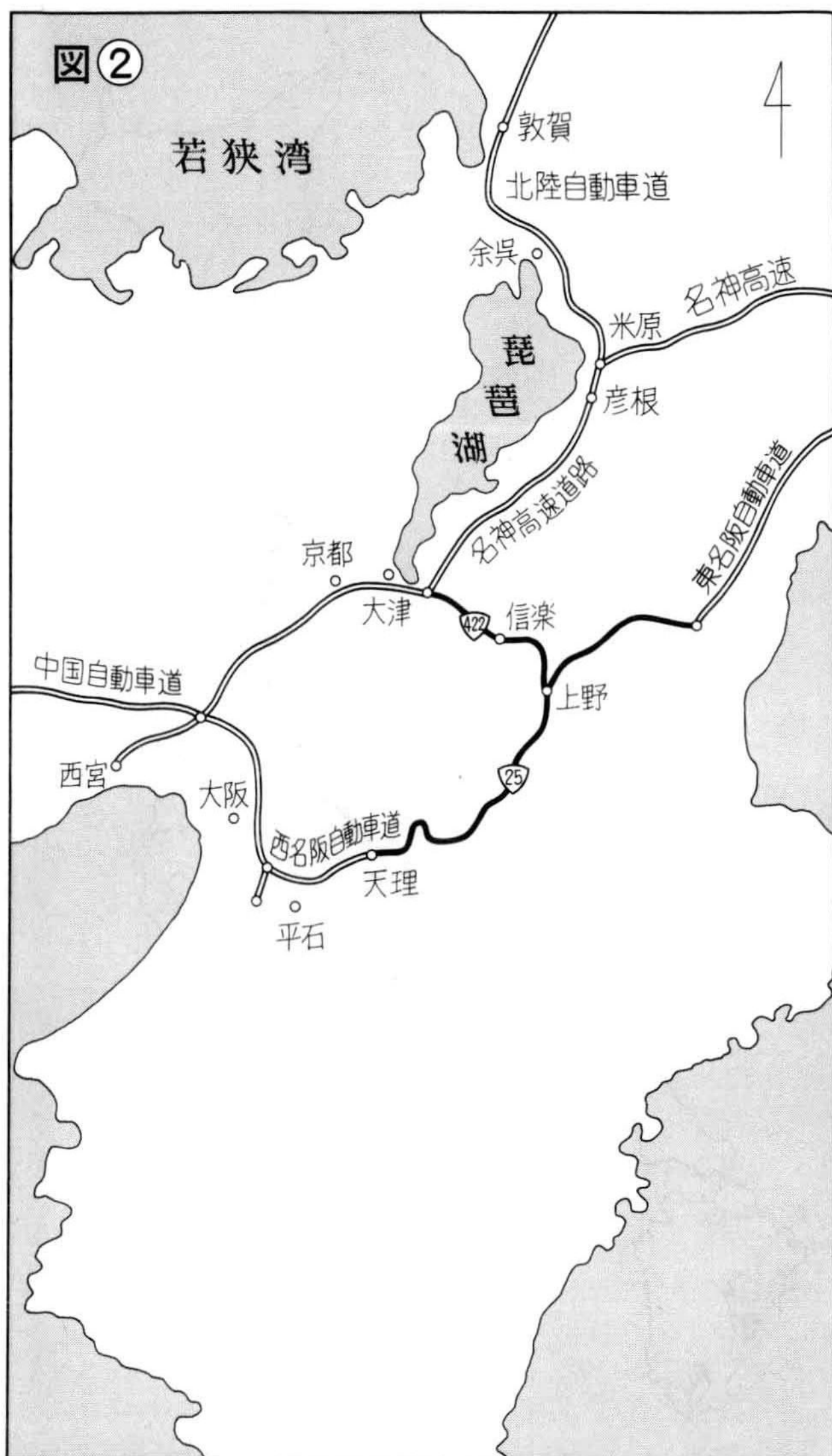
加瀬警部

杉山警部補

広瀬警部……………空知の創作中の主人公

図① 若狭湾



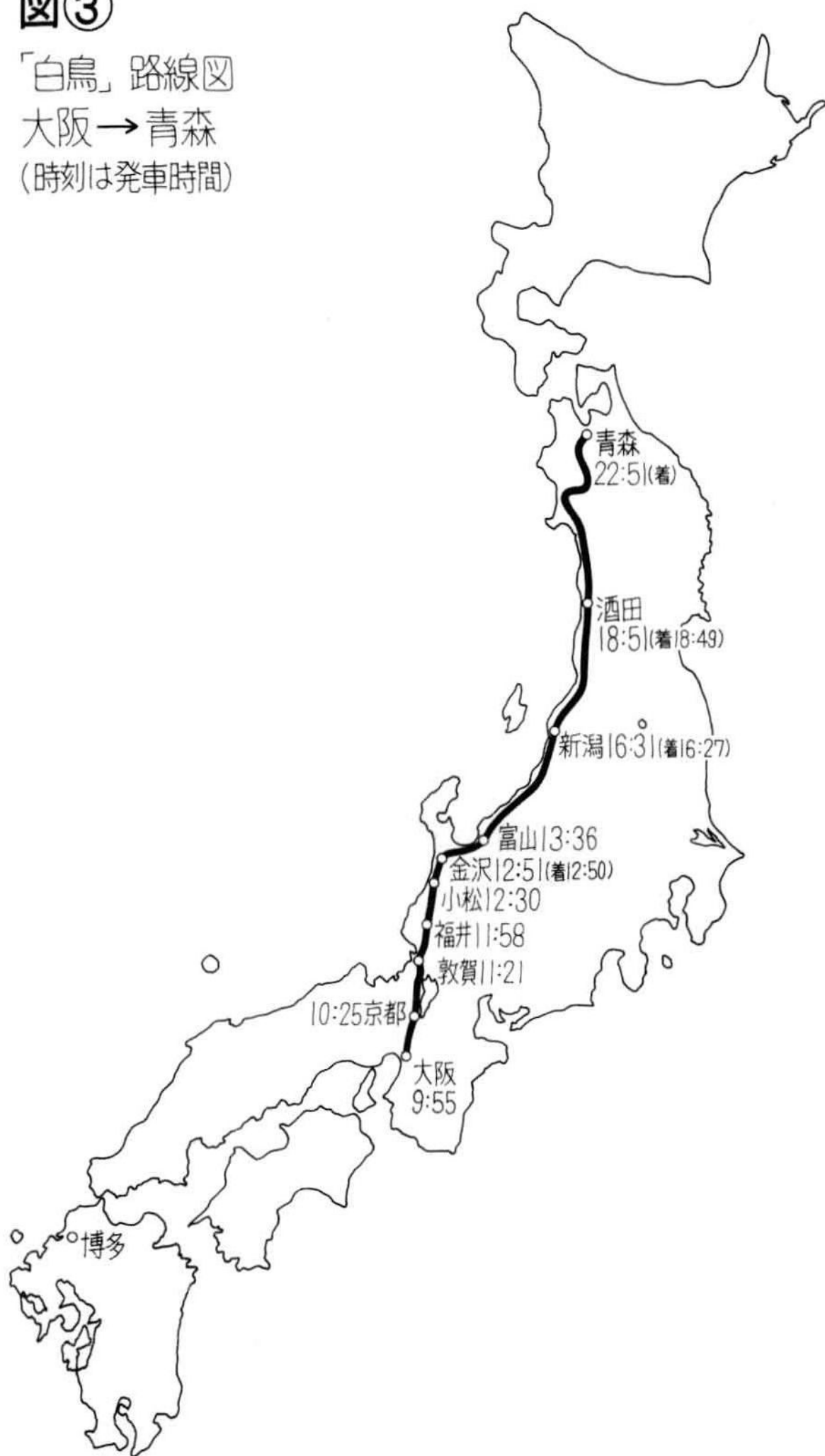


図③

「白鳥」路線図

大阪→青森

(時刻は発車時間)



ダイアローグ

男たちは暗い部屋にいた。

一人は窓辺に立ち。

一人は椅子に掛け。

ヘッドライトと尾灯の川を見降ろしながら、窓辺の男は黙ったままだった。椅子の中の男が低い声で独白のように『計画』を話すのを聞いているのかどうかも定かでない。

話していた男も相槌のあいづちの一つもないのが気になったか、窓辺の男の背中に向かって声をかけた。

「聞いてんのか？」

窓辺の男は「ああ」とだけ返事を吐き出した。

「明日やろう。今の段取りでええな？」

椅子の男がそう確認を求めると、窓辺の男は一度小さく咳払いをした。

「そこまでする必要が……あるかな」

椅子の男の眉根に皺しわが寄る。

彼は、パチンとシガレットケースを開いた。

「何や、気が進まんって言うんか？」

窓辺の男は「いや」と口の中で言っただけだった。椅子の男は窓辺の男の背中をしばらく見つめていたが、相手がさらに言葉を継ぐのを待つように、ゆっくりとした動作でシガレットケースから煙草を

一本取り出すと、唇の端でくわえて火をつけた。

「後味のよくない仕事になりそうだな」

窓辺の男がようやくそれだけ言った。椅子の男は何を今さらと言うように、音をたてずに舌打ちの真似だけをした。

「後味の悪さは金が忘れさせてくれる。この期に及んで躊躇^{ためら}ってどうする」

椅子の男はそこでふと思いついたように、くわえ煙草のまま窓辺の男に尋ねた。

「お前、あの女に惚れでもしたか？」

「いいや、そんなんやない」

窓辺の男は夜景に向かって首を振った。

「金の為に動いてるんや、お前も俺も。やり始めたビジネスは最後までやり遂げるもんやぞ」

窓辺の男はそれに応えず、部屋に短い沈黙が落ちた。

「最後までやるんや。ええな？」

椅子の男は念を押すように言い、窓辺の男は再び

「ああ」と吐き捨てた。

「明日。明日やぞ」

椅子の男は繰り返した。くどいと思ったか、窓辺の男はくるりと振り返った。

「判ったよ、もう」

二人の男は向かい合った。

「なら——ええ」

椅子の男は二度ほどふかしただけの煙草を灰皿の中で揉み消した。

「元気だせよ、兄弟」

男は椅子から立ち上がった。

暗い部屋の中。

対話は終わった。

部屋の中央に大きな姿見が立てられているかのような眺めだった。

同じ顔の二人の男たちは向き合ったまま、同時に頷^{うなづ}いた。

第一章 湖畔の死

1

「そんなことはあり得ない。不可能ですよ。警部さん、あなたはお忘れになってるんじゃないでしょうね？ 事件当夜、私は宮崎にいた。その私がどうやって仙台で殺人が行なえたと言うんですか？」
彼が力みながらアピールするのに対して、広瀬警部は落ち着き払って答えた。

「ええ、あなたは終始そうアリバイを主張してこられた。それが私ども捜査陣にとってどうしても突き崩せない大きな壁だったわけです。——しかし少し様子が変わってきました。私は昨日、宮崎にあなた

のアリバイの裏を取る為に自ら足を運びました。やはり現地へ行ってみるもので、私は宮崎駅で非常に興味深い、ある事実が気がついたんですよ」

彼の背筋にぞくりと悪寒が走った。

（こいつ、何に気がついたって言うんだ……？）

「ここまで？」

片桐は原稿から顔を上げて言った。

「そう」

空知はデザートのシャーベットをすくいながら答える。

「連載小説をやってるわけじゃないんですよ。書き下ろしなんだから、わざとらしくこんないいところでもない切んなくてもいいじゃないですか」

「はは。意地悪やから、僕は」

「ったく。——続き、気になるなあ」

「ビール、もう一本飲みますか？」

「もちろん」

そう言うのと片桐は大声をあげてウェイターを振り向かせ、人差し指を突き立てて「黒、黒」と繰り返した。人の話し声と生演奏で賑やかな広い店内だが、そんなにどならなくてもよいものを。

「ブレリアですよ」

「え？」

「今演^やってる演奏ですよ。懐かしいな。私、これを卒業コンサートで演ったんですよ。七年ぶりに聞きました」

片桐が大学時代にフラメンコギターのサークルに所属していたことは聞いていた。今も現役で、爪に瞬間接着剤を塗り込んだ跡がある。弦を思い切り強く弾く必要があるフラメンコのギタリスト独特の爪だが、知らない人間が見たなら異様な感じがするだろう。

「そんな爪してても許されるんやね、片桐さんのところは」

「これですか？」と自分の指の先を見て彼は「うち

は出版社の中でも特に自由な社風ですから、これぐらい誰も気に留めませんよ。受付の子がお齒黒を塗りでもすりゃ慌てるかもしれませんけど」

「ええ会社なんですね」

「皮肉ですか？」

「とんでもない。僕もそんな会社勤めを経験してみなかった」

片桐に黒ビールが、空知に紅茶がきた。受け皿に角砂糖がのっているのを見て、空知は今時のレストランで珍しいな、と思った。

セピア色の液体の中に角砂糖を二つそつと落とす。彼は角砂糖が好きだった。カップの中のそれが、ゆっくりと自壊の気配に満ちていくのをしばし見つめる。そして、スプーンをカップに入れて上方で静かに紅茶を掻き混ぜると、円形の対流の中で角砂糖はゆっくりと崩壊を始める。その様を観察することが、彼のささやかな楽しみだった。それを楽しむのに適しているからこそ、彼はコーヒーより紅

茶を選ぶのかもしれない。

形あるものはみな、いずれ滅びる。割れ、砕け、折れ、散り、溶け、腐り……。——彼は『崩れる』というイメージに何故か惹かれた。老朽化した高層ビルが爆破され、崩れ落ちるシーンをいつかテレビのニュースで見た時には、軽い眩暈を覚えすらした。

「真剣な顔をして何を見てるんですか？ 茶柱でも立ってます？」

一気に一杯呷った片桐がからかって言った。空知は少し照れて笑う。

「新しいトリックがぼんやり浮かびつつあったのに、ぶち壊してくれましたね」

「またまた」彼は口の端の泡を掌で拭いながら「空知さんがあんな真剣な顔する時は推理小説のことを考えてる時じゃない。何か猥褻な想像をしてる時でしょ？」

「アホな」

二人は笑った。一曲終わり、拍手が湧いた。片桐もコップを置いて手を叩く。

「片桐さんが酔うてしまいう前に仕事の話をしておう。——まだ肝心の結末を読んでもろてないけど、どうですか、今度のは？」

空知が言うのと、片桐はずっと真面目な顔になった。

「いいですよ、とても。アリバイトリックのスケールが大きそうだし、容疑者が絞られてく過程も論理的です。犯人は憎らしいし、広瀬警部はいつも以上に渋い。バイ・プレイヤーも面白い人物揃いですね」

「うまいこと言うなあ。書いてる最中の作家にはよいしょよいしょで、できてからまとめてあげつらう。これが編集者のセオリーなんでしょ？」

「そんなセオリーありませんよ。つまらないなど途中で思っても、そうはつきりと私なんか言えませんけど、わざわざこんなに褒めたりはしません。そん